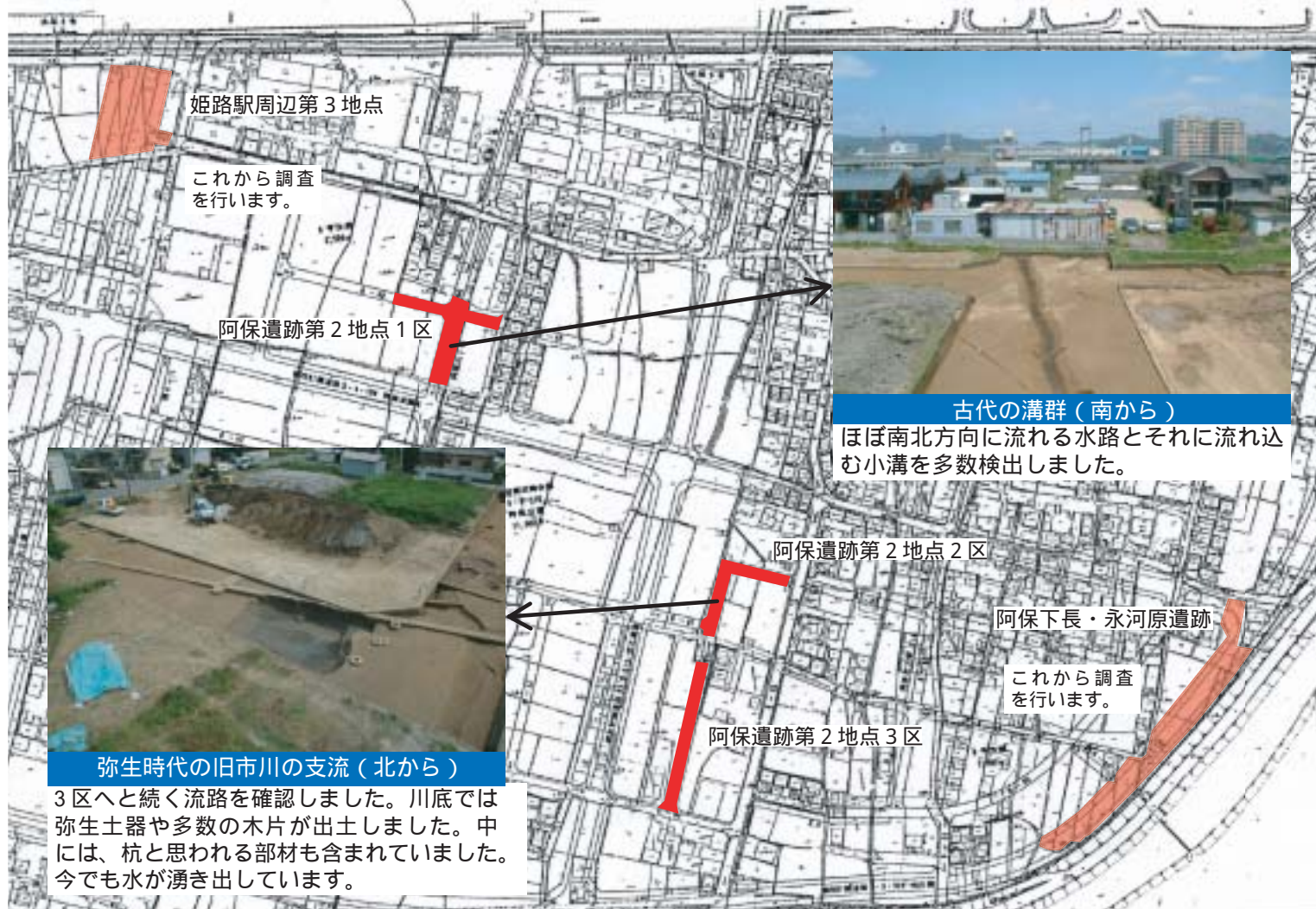


その他の地点の調査成果



阿保遺跡第2地点発掘調査 （第6次） 現地説明会資料

平成18（2006）年6月24日（土） 13:30 ~



はじめに

阿保地区における埋蔵文化財の発掘調査は今年度で6年目を迎えます。これまで様々な時代の遺構・遺物が数多く発見されてきましたが、今回の調査で初めて弥生時代の住居跡を確認することができました。住居跡からは弥生土器のほか、サヌカイト製の鏃（やじり）が出土しました。また、石器を加工する際に生じる石屑（いしくず）も多数あり、他地域産の石材を地元のムラに持ち込み、石器を製作・加工していることもわかりました。

阿保地区における弥生時代の人々の生活をこれほどまでに鮮明に示すものはなく、当時の社会を復元するうえでも重要な成果であるといえます。

阿保遺跡第2地点（第6次）発掘調査 現地説明会資料
平成18（2006）年6月24日（土）
姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 姫路市四郷町坂元414 番地1 TEL (079) 252-3950

姫路市埋蔵文化財センター

阿保地区で初の竪穴住居跡(弥生時代中期(約2000年前))



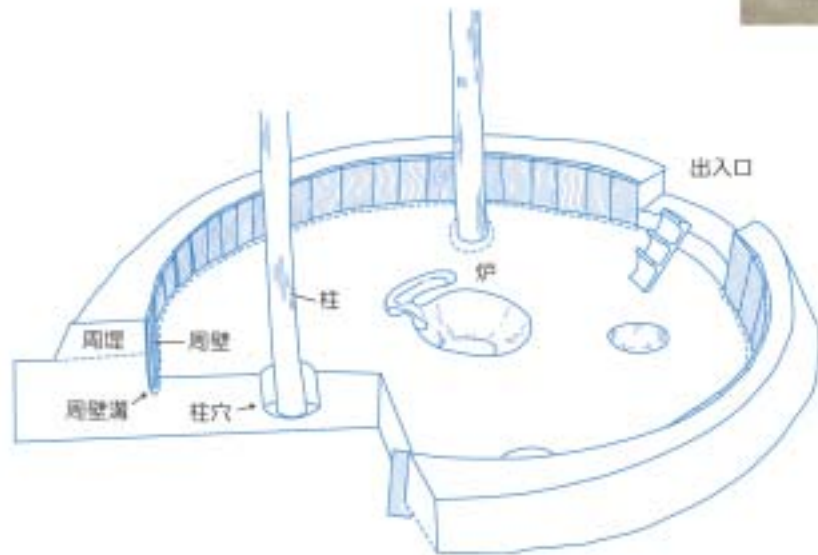
阿保遺跡第2地点3区 全景(南から)



竪穴住居跡(北から)



土器が出土した状況



今回調査を行った住居跡の復元図

竪穴住居跡は平面が円形で、直径約8m、深さは10cm程度ですが、本来はもう少し深かった可能性があります。住居の周囲に周壁溝(しゅうへきこう)という溝を掘り周囲の土が崩れてこないように壁となる板材をはめ込んでいたようです。この住居に伴う柱穴(ちゅうけつ)は全部で6つ確認できましたが、整然と並んではいません。

床面より少し浮いた状態で、弥生土器やサヌカイトの剥片(はくへん)が出土しました。その土器の特徴からこの住居は弥生時代中期後半に廃棄され、埋められたと考えることができます。

また、今回の住居内に別の周壁溝も見つかっており、少なくとも1回は建て替えがあったことがうかがえます。

炉は中央部に設けてありました。細長く深さ10cmの浅い溝状の土坑(どこう:穴)と、楕円形で深さ約30cmの土坑がセットになっているのが特徴で、弥生時代中期後半～後期後半に播磨を中心とした地域でよくみられる構造をしています。

細長い土坑には炭や灰が入っており、内部は熱により赤く変色し、硬くなっていました。一方、楕円形の土坑にはそのような様子はみられないことから、細長く浅い土坑が中心的な燃焼施設であったと考えています。

今回の調査では、細長い土坑から楕円形の土坑へと続く炭や灰の掻き出し口ともいえるような部分も確認しています。



住居跡中央部に設けられた炉跡